

消して惑ふ處に老人の申しけるは此事八九年以前加様の事有り、是は定て信州淺間の焼る灰ならむと云仍テ諸人少心を取直しけるに、段々晚景に至、夜に入るに隨て彌強く降亥きり、後には黒き砂大夕立の如く降來て、終夜震動し、戸障子杯も響き裂、恐しさたとへん方なし、總じて晝八つ過るは空暗き事夜の如く、物の相色も見へ分ねば、悉家々に燈をとぼし、往來も絶々に、廻通行の人は此砂に觸れて目くるめき、怪我杯をせしも有とかや、諸人に何の所以を不知ば、是なん世の滅するにやと、女ナ童は泣さけぶ處に、翌日富士山燒候由、注進有てこそ、扱は其砂を吹出して如此ならんと、始て人心地ぞ付たりける、砂降積る事凡七八寸、所に寄一尺餘も積しとぞ、事畢て、砂を掃除すといへども、板屋杯は七八年過候以後迄も、風立候折には砂を屋根レ吹落し、難儀いたしける由、亦翌月春に至、感冒咳嗽一般にはやり、家々一人も洩ず是に惱さる、其節狂歌に、是やこの行も歸も風ひきて知るも玄らぬも大方は咳、前代未聞の事共也、右之刻駿州富士郡ル注進之趣、

昨廿二日、晝八時ル、今廿三日迄の間、地震間もなく、三十度程ゆり、民家夥敷潰れ申候、扱廿三日晝四時ル、富士山夥敷鳴出ナガシタマツル、富士郡一チ面響渡、男女絶入仕ル者多くとも、死人は無御座候然處に山上ル煙夥く巻き出し、山大地共に鳴渡、富士郡中一面に烟渦巻候故、いか様の譯共不相知人々十方を失ひ罷在候晝の内は煙計相見候處、夜に入候へば一遍に火炎に相成候其以後如何様に成候哉不奉存、先右燒出候節、不敢敢爲御注意罷越候故、委細之義は跡ル追々可申上候由、

右注進の後、彌火氣熾に成、土砂石礫を吹飛し、遠國廿里四方へ砂石を降せ申候、伊豆、相模、駿河は所々寄て貳丈餘も降積、堂社民屋も埋レ、勿論田畠ノ荒レ夥しく、日を経て稍々焼鎮ムクシタマツル、其土砂を吹出せし所穴と成、其穴の口に大なる山を生ず、世俗呼で寶永山と號、本ニ海道の方ル眺ば、右流ナガレ